

使徒言行録 2:1-4 「世界の国々の言葉で」

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」

先週の日曜日、ロンドンのバッキンガム宮殿に世界の8つのスタッフバンドが集まりました。トラファルガー広場からバッキンガム宮殿に向けて「ザ・マル」という広い道路が通っております。イギリスの国家式典のために設けられたパレード専用道路です。ここを救世軍の8つのスタッフバンド、250人近くの楽隊員が旗をかかげマーチを奏で行進いたしました。バッキンガム宮殿の庭に入りまして11曲演奏いたしました。

スタッフバンドというのは救世軍の本部、本営と申しますけど、本営に設けられてる専属のブラスバンドです。金管楽器と打楽器だけで構成されてるのが特徴です。世界には8つのスタッフバンドがあるんですが、その筆頭格でありますインターナショナル・スタッフバンドが今年創設120周年を迎えるというわけで、ロンドンで記念行事が行われました。そこへ8つのスタッフバンドが招聘されまして、わたくしもジャパン・スタッフバンド、略してJSBと言いますけども、JSBの打楽器奏者として参加してまいりました。

土曜の午後にロイヤル・アルバート・ホールでコンサートが行われまして、わたしたちジャパン・スタッフバンドの出番となって舞台に上がりますと、満堂の聴衆が全員スタンディング・オベーションで迎えてくれました。大きな日の丸をふってるイギリス人もおりまして、拍手と喝さいが3分も続きました。一曲目をなかなか始めることができず、感動して泣き出す楽隊員もありました。わたしたち地震、津波、原発事故で大きな痛手、しょいきれない重荷を背負わされてるわけですが、世界の人々がいかに心配し応援してくれてるか、骨身にしみた3分間でした。そのあと6曲演奏しまして、演奏終了後のスタンディング・オベーションは残念ながら無かったんですが。それにしてもイギリス人がロイヤル・アルバート・ホールで日の丸をふるなんて、とても考えられない。あれをみながら、「ああ、日本の長い戦後はこれで本当に終わったんだ」としみじみ思った次第です。

救世軍がなんでブラスバンドをやるかというと、それはぜんたいイエスキリス

トを伝えるためです。今回の演奏ツアーでベイジングストーク小隊へ行きました。コンサートをしましたけども、小隊の会館に大きな古い写真が飾ってありました。救世軍が始まったばかりの1880年代に起こった大迫害をとった写真でした。道路つばたに立って福音を説教している救世軍人たちを何千人もの群衆が取り囲んで、暴力をふるい、騎馬警官隊が出動している写真です。イエス様を信じて救われたら人間が変わって酒の魔力から解放されるんだ。これが救世軍が伝えてる福音ですけども、アルコール製造業者は商売にさわりが出るのを恐れて、お金を払ってチンピラを雇って暴動を起こさせたという。そんなことが100年以上前にあったのです。そういう暴動のさなかに、チャールズ・フライというひとが三人の息子と一緒にコルネットを吹きまして、救世軍の路傍伝道、野戦と言いますけども、コルネットを吹いて野戦を助けました。そうしますと不思議なことに、荒れ狂っていた群衆が静まりまして、ラッパのかなでる讃美歌に聞き入ったというのです。こうして救世軍はさかんにラッパを用いるようになりました。ギターやクラリネットみたいな木で出来た楽器でしたら、迫害でボキッと折られたら、もう演奏できません。だが分厚い真鍮で出来た当時のラッパは、多少ゆがんでもへこんでも雨が降っても石が飛んでも、演奏を続行できたのです。イエスキリストの福音を伝えなければならない。何があろうと伝え続けなければならない。今日お読みいただいた聖書に「燃える炎のような舌」とございました。イエスキリストの福音というのは、紙切れに書いて箱にしまっておくものではない。静かに理解して自分の頭にしまっておくものではない。イエスキリストの福音は、はっきり声に出して、はっきり口に出して、語らなければいけない。はっきり声に出して相手に伝えなければいけない。それが福音です。しかも一度福音を語ったら、もう黙ってしまってよいというものではない。何度でも語り、何度でも伝え続けなければならない。わたしたちが立ち上がって誰かにイエスキリストを伝えるという、その行為そのものが「福音」なのでありまして、それが今日の聖書箇所「燃える炎のような舌」という表現が言わんとしてるところであります。

今日の聖書箇所にもまた、「風のような音がした」とある。風というのは、旧約聖書が書かれているところのヘブライ語におきましては、ルーアッハという言葉になってます。ルーアッハというのは、風という意味がある、命の息という意味がある、神の霊・神の御霊・聖霊という意味がある。ラッパというのは、これがどんな高い楽器であっても、どんな安い楽器であっても、そこへただぽんと置いてあるだけなら、どんな音だって出やしません。救世軍では1970年代までロンドンのセントオルバンというところに専属の楽器工場を持っておりまして、コルネットからトロンボーンまで救世軍オリジナルの金管楽器を作っ

てました。中でも「バンドマスター」というホルネットの最上位のモデルが救世軍人の間で大変珍重されたんですけども、それだって、ただそこへ置いてあるだけだったら、どんな音も出やしない。だが、その楽器がひとたび手に取られ、ふーっと息を吹き込まれたら、たちまち美しいメロディーをかなではじめます。重要なのは、命の息が吹き込まれなきゃならない、ということです。ひるがえって、わたしたちはどうなんだろう。わたしはずいぶん立派な人間だ、そう思っている向きもあるでしょう。わたしはずいぶんつまらない人間だ、そう思っている向きもあるでしょう。だが、わたしたちがどんな人間であれ、自分をまったく神様の御手にゆだねる、っていうことをしないかぎり、何にも始まらないのです。わたしたちは、自分自身をまったく神様の手におゆだねなきゃならない。おゆだねするなら、神様は命の息をわたしたちのうちに吹き込んでくださる。命の息、ルーアッハ、それは神の御霊であり、聖霊であり、風であります。わたしたちにとって最も重要なことは、命の息である聖霊を受ける、ということであります。命の息を吹き込まれたラッパが美しいメロディーをかなでるごとく、わたしたちは聖霊を受けたんなら、神様の御心を行うことができるようにされるのです。

今日の聖書箇所でもまた「いろいろの他国の言葉で語り出した」とある。イエスキリストの福音は、ひとりユダヤ人だけのため、というものではない。イエスキリストの福音は、ひとり日本人だけのため、というものではない。あらゆる民族、あらゆる国民、あらゆる言語、あらゆる人種、すべての人のためのもの。それがイエスキリストの福音である、ということです。旧約聖書の時代においては、神様の祝福に与るのは、ひとりユダヤ人だけだ、という狭い考え方がなされておった。これを選民思想と言いますけども、しかし、イエスキリストの出来事において、これが全部ひっくりかえってしまった。イエスキリストは、全人類を救うため身代わりとなって十字架にかかり、三日目に復活してくださった。イエスキリストが死んでよみがえりたもうた。誰のためか？ あらゆる民族、あらゆる国民、あらゆる言語、あらゆる人種、世界のすべての人のため、であります。

あなたの罪を赦すため身代わりにイエス様は十字架にかかって死んでくださった。永遠の命を与えるため三日目に復活してくださった。これを信じなさい。このメッセージは、日本人だけじゃない、世界のすべての人が聞かなければならないメッセージであります。

このメッセージに対して、アーメン、わたしは信じます、という応答をしたら、

どうなるのか。アーメンと言った人たちは、言葉は違い、人種は違い、肌の色は違い、生活は違っていても、キリストイエスにあって一つに結ばれることが出来るのです。

バッキンガム宮殿におきまして、世界の8つのスタッフバンドが集まりました。そこにいたのは、日本人、イギリス人、アメリカ人、ドイツ人、オランダ人、カナダ人、オーストラリア人です。言葉が違い、人種が違い、肌の色が違い、生活が違っている250人以上の人たちです。それが事前のリハーサルなし、ぶっつけ本番で、長い長い道路「ザ・マル」を行軍し、乱れることなくバッキンガム宮殿の庭に入り、息を合わせて11曲を演奏いたしました。楽隊員全員が「赤本」と呼ばれるマーチ用の楽譜を手にして、楽長が振る指揮棒を一心に見つめて、ひとつに溶け合って演奏したのです。

わたしたちはみな、聖書という、同じ神様の御言葉を手にしております。わたしたちはみな、聖霊という、同じ命の息を自分のうちへいただいております。わたしたちはみな、イエスキリストというただひとりの指揮者を一心に見つめております。だからこそ、言葉は違い、人種は違い、肌の色は違い、生活は違っていても、ひとつに溶け合って、互いに愛し合うというメロディーをかなでることができるのです。ヨハネは手紙で言いました。「兄弟たち、互いに愛し合おうではないか！ 神は愛なのだから！」

さて、ひとつに溶け合って、互いに愛し合うということは、まったく問題がない、ということの意味しません。かえって、いろいろ問題がございます。問題がなくてひとつだ、というんではない。問題があって、なお、ひとつになることができるという、ここが肝心であります。

ロイヤル・アルバート・ホールの午後のコンサートの入場直前、わたしはひとりの楽隊員から大事な楽譜をわたされたんですが、なにせ緊張して頭が真っ白だったもんだから、そいつをそばの椅子に無意識に置いたまま、どこへやったかわからなくした。いよいよ入場というとき楽譜が無い！と大騒ぎしまして、舞台へ出る10秒前に発見するありさまでした。こういう問題がございます。

ロイヤル・アルバート・ホールの土曜の夜の大演奏会のとき、8つのスタッフバンド全員そろって入場しまして、打楽器奏者は打楽器奏者に指定された座席へ座ることになってたんですが、行ってみますと知らないご婦人方がおめかしして座っている。どいてくれ、というわけにもいかない。しかも、座席を確保

するため前もって置いといた太鼓のバチと楽譜が、どこも見当たらない。8つのスタッフバンド合計25人近くの打楽器奏者たち、大男ばかりが、どこも行き場がなくなって、舞台裏をあっちこっちさまよいあるく始末となった。見かねた係の人が「二階にちょっと席があるだろうから」と、裏の階段をのぼって案内してくれてる最中に、われわれの出番の演奏が始まる音が聞こえて来た。わたしはもうあきらめましたけど、J S Bの同じ打楽器奏者の同僚、彼女は唯一大男ではなく小柄な女性でしたけど、弾丸のように走って行って、演奏が半分進んでる舞台に忽然と現われて、途中からグロッケンシュピールを叩き始めるという勇ましさでした。こういう問題がございます。

この大合同演奏会の入場のときに、各国の軍旗と国旗を先頭に入場したんですけども、舞台係の指示というのは、入場が終わったら軍旗と国旗は舞台裏の廊下へ置いとけという。それはどういうことなんだ、廊下へ置いといてそのあとどうするんだ、というふうに聞きましたが、知らん、わからん、という。ほかの国の人たちは大した考えもなくそのとおりにしたんだけど、わたしたちは真面目な日本人である。命をかけて守れと言われてる軍旗、国のシンボルである国旗、それを無造作に廊下の床に置いといて気持ちいいわけがない。で、軍旗軍曹が気をきかせて、J S Bの軍旗と国旗だけ綺麗に畳んでおいた。ポールも三つに分解してケースにしまった。大合同演奏会の最後のマーチが始まったとき、別の係から「さあ、いまだ、軍旗と国旗を持って舞台に上がれ」と言う指示が出た。わたしは目を白黒させて軍旗軍曹をさがしましたが、どこもみつからない。もう曲が三分の一まで進んでる。しかたないから自分でポールを組み立てて、軍旗と国旗を取りつけて、二本丸抱えで舞台袖に走った。途中で軍旗軍曹を見つけて軍旗を渡して、もう曲は最後の小節まで来ちゃってる。わたしが国旗だけ掲げて舞台へ出ますと、ちょうどそこで曲が終わった、全部の旗がそろって大団円、というありさまでした。これが日本だったら、リハーサルするときちゃんと台本をわたして細かい指示をするはずなんだが、何にも言わないんだから実に大雑把なものです。こういう問題がございます。

イエス様を信じてたって、いろいろな問題が全然起きないわけではない。問題は起きるのです。ですから、われわれはストレスにさらされます。演奏旅行の最中、あるひとりの楽隊員は、非常に細かい、どうでもいいと思えるようなことについて、あれやこれや問いただしておりました。ほんとうに不安が顔に表れているという感じでありました。ちょっと離れたところで、もうひとりの楽隊員が言いました。「彼の気持ちが安定するためには、あれを言わせてあげないといけないんだよ。みんなで受け止めてあげなきゃね」 いろいろ有名なアー

ティストやプロのミュージシャンがツアーの最中にバックバンドと喧嘩分かれ
て解散に至った、という話をよく聞きますけども、ああ、この救世軍バンド
は大丈夫だ、と思いました。イエス様を信じてたって、問題が起きないわけ
ではない。問題は起きるんです。しかし、わたしたちはイエスキリストにあっ
て、お互いがお互いを兄弟姉妹として尊重し受け止め合っている。問題がないとい
うんではない。問題があるにもかかわらず、お互いを理解して、お互いをゆる
して、お互いを広い心で受け止めて、問題を越えて一緒に進んで行こうとする
んです。これが聖書の言う「平和のきずなで結ばれてひとつになる」と
いうことであります。そこで今日の聖書の一番最初の言葉に戻るなら、「一同が
一つになって集まっていた」という、これであります。平和のきずなで結ばれ
てひとつになるという、これがまことのキリストの教会の姿であろうと思いま
す。わたしたちは今日みんな聖霊を新たに受けると共に、聖霊を受けたこと
の結果としての「平和の一致」すなわち、お互いがお互いを受け入れ合っ
て、ひとつになるという、平和の一致を実現して行きたいものです。